

旧約聖書の中の祈り

□ 「祈り」に関する学び全体のテーマ

1. 祈りの原則
2. 祈りの3つのタイプ
3. 旧約聖書の中の祈り
4. 新約聖書の中の祈り
5. 祈りの条件
6. 祈りの構成と内容
7. 祈りのルール
8. 祈りの諸問題

□ 「旧約聖書の中の祈り」の学びの進め方とその目的

旧約聖書の中には、全部で48の祈りがあります。これらの祈りをひとつひとつ学んでいて、祈りについてのいくつかの結論を導きたいと思います。その結論を先に言うと、次のとおりです。

1. 旧約聖書の中の祈りの大半は、とりなしの祈りである
2. 祈りは、しばしば、嘆願である
神に何かを求める。たとえば、エリシャは、自分のしもべに天使たちの軍勢を見させてほしい、と神に願った。ヨナは、いったんは拒んで逃げてしまった使命を再び帯びて遣わされるようにと祈った。ヒゼキヤは重病の中で自分の命が助かるように祈った。ネヘミヤは周辺からの激しい脅しから守られるように祈った。
3. いくつかの祈りは、神に感謝をささげる、あるいは神をほめたたえる歌である
そのような祈りをしたのは、たとえば、ハンナ、ダビデ、そしてハバクク
4. いくつかの祈りは、特別な状況の中で神のみこころを尋ねる祈りである
5. 祈りは、時として、神の約束に基づいてなされる
モーセ、ソロモン、そしてダニエルは、それぞれ、それまでに神から与えられていた約束に基づいて祈った。彼らは、神が約束を守るお方であることを知っていたからこそ、その約束を握って祈ったのである。
6. 祈りは、時として、罪の告白を伴う（ダニエル9章）
7. 祈りは、時として、祝福の祈りである
レビ族の祭司がイスラエル民族全体のために祝福の祈りをする（II歴代30:23~27）
8. イスラエル民族の中で責任ある地位につく指導者は、民族全体のために祈る責務を負う
そのような例は、サムエル、ソロモン、そしてエズラ

9. 祈りには、時折、付随した行動が伴う。泣く、断食する、荒布を着る、灰をかぶる
10. 祈る時、人々は様々な姿勢をとっている。立つ、跪く（ひざまずく）、両手を上に伸ばす、エルサレムとそこにある神殿の方を向く、犠牲の動物を前にして祈る、寝室で壁の方を向く、など
11. ダニエルは1日のうちに3度、時間を決めて祈っていた
特定の時刻を祈りの時間とするような定めは、ない。しかし、一日の中で、自分で時間を決めて祈る習慣をつけることは、神との交わりを通して祝福を受けるために必要
12. 祈りは、モーセの律法の中で義務付けられていない。また、あらかじめ書かれた式文のような祈りは、旧約聖書の中にひとつもない。祈りとは、自分が必要を覚え、その必要に応じる力を神が持っている意識している人から、自然と沸き起こってくるものである。
13. 祈りは、時折、犠牲をささげながら祈られる。犠牲をささげないとしても、犠牲をささげる場所や時間と関連付けて祈ることもあった
14. 旧約聖書の中に記録された祈りには、大きくは5つの要素がある
 - (1) 神による導き
 - (2) 神による癒し
 - (3) 神のさばきを免れる、あるいは止める
 - (4) 神に自分の個人的な望みや必要を求める
 - (5) 神に特別な状況のもとで守りを求める

前回までに48の祈りのうち、42の祈りを学びました。本日は、43～48番の祈りです。

「旧約聖書の中の祈り」の最終回です。次回からは、「新約聖書の中の祈り」に入ります。

□本日のアウトライン

43. 預言者ダニエルの祈りの習慣
44. 預言者ダニエルがイスラエル民族のためにした祈り
45. 預言者ヨナがよみがえったときの祈り
46. ニネベに対する神のさばきが止められたことについての預言者ヨナの祈り
47. 神の激しい怒りが下される年々（大患難期）についての預言者ハバククの祈り
48. ベテルの人々がエルサレムに来て主にうかがいを立てたことに関して

旧約聖書の中の祈り【48の祈り】 ⑤

参考：本日の6件の祈り（上の行から下の行へ時系列で）

番号	時期	祈った人	時代背景など
			アモス預言 北王国は滅び、民はダマスコのか なたへ捕らえ移される（アモス5：27）
45	前824	預言者ヨナ	神からの使命（アッシリヤ行き）を拒む
46	～783	預言者ヨナ	アッシリヤの首都ニネベでの使命を終えて
	前723		北王国 アッシリヤによって滅亡
47	前630 ～622	預言者ハバクク	南王国 ヨシヤ王によってダビデの道への回 帰が進行していた。前622頃 律法の発見
	前612		アッシリヤ バビロニアによって滅亡
	前605		第1回バビロン捕囚 ダニエルたち
	前597		第2回バビロン捕囚 エホヤキン王たち、 祭司エゼキエルも
	前586		エルサレム陥落、第3回バビロン捕囚
	前539		覇権はバビロニアからメディア・ペルシヤへ
43	前539	預言者ダニエル	メディアのダリヨス王、獅子の穴事件
44	前539	預言者ダニエル	エレミヤの70年の預言を知った
	前538		ペルシヤのクロス王による帰還命令
48	前519頃	ベテルの一行	捕囚から帰還して神殿再建中

43. 預言者ダニエルの祈りの習慣（ダニエル書6章）

(1) ダニエル書6章の内容

- ① ダニエルの失脚をねらったわな（1～9節）
- ② ダニエルの祈り（10～11節）
- ③ ダニエルの逮捕と獅子の穴（12～18節）
- ④ ダニエルの無罪証明とわなを設けた者たちへの同じ処置→彼らに罪があった
ことの証明（19～24節）
- ⑤ ダリヨス王がダニエルの神を認めた勅令（25～27節）

(2) ダニエルの祈りに見られる5つのこと

- ① 10節 エルサレムの方を向いて祈った。これは、ソロモンが神殿を奉献した
ときの祈りに基づく（1列8：46～53、48節「あなたが選ばれたこの町、私
が御名のために建てたこの宮のほうに向いて、あなたに祈るなら」）。ダニ
エルはこのために、エルサレムの方を望む屋上の部屋の窓をいつも開けたまま

にしていた。

- ② 10節 日に三度祈った。
- ③ 10節 ひざまずいて祈った。
- ④ 11節 祈りの中で、哀願した（願い事を申し立てる）。ダニエルが願ったことの中には、荒廃したエルサレムの回復という願いが含まれていたであろう。ダニエルはメディア・ペルシヤの政権中枢にいる高官であったから、その責任をきちんと果たすことができるように、そして同時にエルサレムの回復に向けて賢く事を進めることができるようにと祈ったことであろう。
- ⑤ 10節 彼の祈りの中には、感謝をささげることが含まれていた。もちろん、それは主への感謝である。

44. 預言者ダニエルがイスラエル民族のためにした祈り

(1) ダニエル書9章の内容 5つのポイント

- ① 前539年 メシアの国が到来する条件を文書（複数形）から調べていたところ、エレミヤの預言によるとエルサレムの荒廃が終わるまでの年数は70年であることを悟った（1～2節）
 - エレ25：1～11
 - 1節 前605年 この年に第1回捕囚（ダニエルたち）が起きた
 - 11節 「バビロンの王に70年仕える」
 - エレ29：1～23
 - 2節 前597年 第2回捕囚（エホヤキン【エコヌヤ】王たち）
 - 捕囚の民たちに手紙を書いて彼らを励まし、70年の預言を伝えた
 - 10節「バビロンに70年の満ちるころ・・・帰らせる」
 - エレミヤの文書以外にもダニエルが調べた文書としては、イザヤ書44：28～45：1 エルサレムの再建を命令する者の名は、クロス
- ② ダニエルの祈り（3～19節）
 - 顔を神である主に向けて（エルサレムの方を向いて）
 - 断食をし、荒布を着、灰をかぶって → 罪の告白（4～14節）
 - 願い求めた → 恵みの嘆願（15～19節）
- ③ ダニエルの祈りは、メシアの国が到来する条件に従って祈られている（20節）その条件については、次ページの（2）にて
- ④ この祈りを受けて、天使ガブリエルがダニエルのところに遣わされる。その目的は、ダニエルが祈りを始めたときに、天でひとつのみことばが述べられ、それを伝えるため（21～22節）
- ⑤ その内容は、イスラエルの民とエルサレムについて「七つひとかたまりのものが70」が定められている（24～27節）・・・次ページの（3）にて

- (2) メシアの国が到来する条件を示す文書とその箇所
- ① レビ記 26:40~43 イスラエルが民族的に悔い改めて罪を告白すること
 - ② I列王記 8:46~53 イスラエルが民族的に悔い改めて罪を告白すること、祈りはエルサレムの神殿の方に向けて祈ること
 - ③ ホセア書 5:15~6:3 「彼らが自分の罪を認め」
 - 「わたしの顔を慕い求めるまで、わたしはわたしの所に戻っていよう」この預言は、メシアが一度来て、天に戻ることを示している
 - 「彼らは苦しみながら、わたしを捜し求めよう」 イエスを拒否したあとのイスラエル民族のその後の歴史、エリヤの到来とメシアを待ち続ける彼らの歴史を一言で預言している
 - ④ エレミヤ書 3:12~18 13節「ただ、あなたは自分の咎を知れ」
- (3) 「七つひとかたまりのものが70」の預言
- ① 何が七つひとかたまりなのか、それは文脈によって決まる。ここでは、9:2の「年数」である。
 - ② 7年ひとかたまりが70、すなわち490年である。イスラエルの民とエルサレムについては、490年が定められている。ダニエルは70年だと思って祈り始めたので、天使が遣わされて主のことばが伝えられた。
 - ③ 25節と27節 この70は、3つに区分される。
 - 「引き揚げてエルサレムを再建せよ」との命令が出てから、メシアが来るまで、かたまりが7個と62個（計69個で、483年）
 - 最後の1個（7年間）
 - ④ 26節 2番目の区分の62個の後、最後の1個が始まるまでには時間的間隔がある。その期間には、いくつかの大きな事件が起きる。
 - メシアは断たれ、彼には何も残らない。
 - 断たれる：法的に処刑される
 - 彼には何も残らない：彼には処刑されるような罪状はない
 - 「やがて来たるべき君主」の民が町と聖所を破壊する。
 - ⑤ 26節 「やがて来たるべき君主」
 - ダニエルは世界的覇権国家がバビロニヤ→メディア・ペルシヤ→ギリシヤ→第四の国となることを預言した。
 - 第四の国の最後の王が、「やがて来るべき君主」である（ダニ 7:8~26「小さな角」）。彼は、メシアに対抗して立つサタンの子孫（創世記3:15）であり、新約聖書では「反キリスト」とも呼ばれる。
 - やがて来たるべき君主の「民」：エルサレムとその神殿は、紀元70年、ローマ軍によって破壊された。よって、この「民」とは、ローマ人を指す。そして、反キリストは民族的にはローマ人である女性を母として生

まれるであろう。

- ⑥ 26節「その終わりには洪水が起こり（大軍が動く）、その終わりまで戦いが続いて、荒廃が定められている」
- 創世記 6 章には、随天使たちが人間の女たちと雑婚してネフィリムという異種の人間を産ませ、全地は暴虐に満ちたという記事がある。ノアの洪水の裁きにつながった事件である。
 - 随天使たちの背後にはサタンがいる。このときのサタンの目的は、女の子孫（創世記 3：15）として登場するメシアを生まれないようにすることであった。ネフィリムは「勇士（男性名詞）」（創世紀 6：4）とあるように全員が男であった。女がいなくなれば次の世代は生まれず、メシアは登場できなくなる。これがサタンの計画であった。
 - 第四の国の末期には、今度はサタン自身が、あるローマ人の女性と雑婚して、反キリストとなる人物を産ませるであろう。
- ⑦ 27節 「彼は（反キリストは）1個（7年）の間、多くの者と堅い契約を結ぶ。半個の間（3年半）、いけにえとささげ物をやめさせる。荒らす忌むべき者が翼に現れる。ついに、定められた絶滅が荒らす者の上にふりかかる」
- 最後の1個の7年間は、反キリストがイスラエルと7年間の「堅い契約」=条約を結ぶことで始まる。
 - 1個の半分、すなわち3年半経過した時点で彼は条約を破棄し、イスラエルを支配し、神殿祭儀を停止させる。自らを神と称し、自身の偶像をエルサレムの神殿に設置する。
 - ついに神が定められた時が来て、その偶像は破壊される。偶像が破壊されるということは、反キリストが滅ぼされることを示す。

45. 預言者ヨナがよみがえったときの祈り

(1) ヨナ 2：1～9

(2) この祈りの背景と経緯

- ① II列 14：23～28 によると、ヨナはガリラヤ地方のガテ・ヘフェルの出身。北王国イスラエルの王ヤロブアム 2 世の治世の時の預言者。
- ヤロブアム 2 世の治世
 - 聖書辞典では、前 793～753 年。ただし父ヨアシユとの共同王が終わり単独王となったのは、前 782 年=ユダの王アマツヤの第 15 年のとき（II列 14：23）
 - フルクテンバウム博士の MBS079 “The Book of Jonah”では、前 824～783 の 41 年間
 - II列 14：25 彼は、レボ・ハマテからアラバの海までイスラエルの領土

を回復した。

- レボ・ハマテ・・・ガリラヤ地方よりもさらに北方の地域
- アラバの海・・・死海の別称

- II列 14:28 かつてユダのものであったダマスコとハマテをイスラエルに取り戻した

② ヤロブアム 2 世の治世下で、北王国イスラエルは対外的には領土を拡張して勢いに乗っていた。アラムシリヤの首都ダマスコまで支配下においたということは、その東に位置する強国アッシリヤと直接対峙して緊張関係に入ったことになる。

- 南王国ユダからアモスが主によって遣わされ、北王国イスラエルにて預言した。その内容は、イスラエルの不信仰と背教のゆえに、神は北王国を滅ぼし、民を「ダマスコのかなたへ捕らえ移す」(アモス 5:27) というものであった。

- 「ダマスコのかなた」とはアッシリヤである。

③ 1:2 主はヨナに使命を与えた。アッシリヤの首都ニネベに出向き、主のことばを伝える使命である。

④ 1:3 しかし、ヨナはその使命を拒み、アッシリヤとは真逆の方角、西へ逃亡した。「タルシシュ行き」(1:3) とは、今のスペインである。

⑤ 1:4~16 ヨナが乗船した船は激しい暴風によって難破しそうになった。このわざわいがだれのせいかわかる、くじを引くとヨナに当たった。ヨナは経緯を説明し、自分を海に投げ込ませた。

⑥ 1:17 主は大きな魚を備えて、ヨナを飲み込ませた。ヨナは三日三晩、魚の腹の中にいた。(ヘブル語聖書では、ここから 2 章となる)

⑦ 2:1 その魚の腹の中から、彼は主に祈った。

- 1:17 からの続きで、三日三晩経たあとに、祈った。英語訳聖書の中には、2:1 の文頭に「Then (それから)」を明記するものもある。
- 2:2~9 に記された祈りの内容から見ると、海に投げ込まれたあと三日三晩のうち何があったかがわかる。それを要約すると次のとおり。
 - ヨナは溺死して、その体は魚に飲み込まれた。
 - ヨナの霊魂はシェオル(よみ)に下った。
 - 三日三晩の後に、生き返った。
- 生き返った時点では、まだ魚の腹の中にいた。このとき、2:1~9 の祈りを祈った。

⑧ 2:10 この祈りのあと、魚はヨナを陸地に吐き出した。

(3) ヨナの祈りの内容 2:2~9 は、3 つの内容に分けられる

① 2 節 「私が苦しみ(捕らわれ)の中から主にお願いすると、主は答えてくだ

さいました。私がシェオルの真っ只中から叫ぶと、あなたは私の声を聞いてくださいました」・・・「シェオル（よみ）の中で祈った。神は祈りに答えてくださり、よみがえらせてくださった」という意味。

- 冒頭でまず、総括的なことを述べるのは、ヘブル的な文章の特徴。この祈りの中心テーマは、死後によみの中で祈ったら、その祈りが聞かれ、死からよみがえった、ということである。
 - 2節で総括的なことを述べてから、次にその経緯を述べ（3～4節と5～7節）、最後に結論を述べる（8～9節）という順序になる。
- ② 3節～4節 海に投げ込まれて、海面を浮き沈みしているときの回想。この時点ではまだ生きている状態であるが、死を覚悟している。そのときに祈ったことばが4節であった。「私はあなたの目の前から追われました。しかし、私は再び、あなたの聖なる宮を見るでしょう。」
- 二重下線部は、新改訳聖書では「仰ぎ見たいのです」と訳されているが、ここは、ヨナの願望をいっているのではなく、見ることになるという断定の未来形である。
 - ヨナは信仰によって救いを受けた者である。一度救いを受けた者はたとえ不従順のゆえに肉体の死を受けることになったとしても、霊的な救いは失わず、必ず神を見ることになる。ヨナはそれを知っていて、その信仰をここではっきりと祈った。聖なる宮を再び見るとは、神を見るという意味である。
- ③ 5節～6節 a 海の中に沈んでいって死んだときの回想
- ④ 6節 b～7節 ヨナのよみがえり
- 「穴」とは、シェオル（よみ）のことである。
 - 「私のたましいが私のうちに衰え果てたとき」とは死んだときのことである。ヨナは死んでシェオルに下ったときも、主を覚えて祈り、その祈りが聞かれて、よみがえったのである。
- ⑤ 8節～9節 結論 ヨナの神の対する約束
- 8節 むなしい偶像に心を留める者は、自分への恵みを捨てます・・・このことはアッシリヤのニネベの人々にあてはまること
 - 9節 しかし、私は、感謝の声をあげて、・・・よみがえらせていただいたことに感謝の声をあげて
 - 9節 二つの約束
 - あなたに動物の犠牲をささげます（ヨナが犯した不従順の罪を贖うため）
 - 私の誓いを果たします（ニネベに行って神から命じられた使命を果たす）

- 9節 救いは神のものです・・・ニネベの人々を救うかどうかは、ヨナが決めることではなく、神にかかっている

46. ニネベに対する神のさばきが止められたことについての預言者ヨナの祈り

(1) ヨナ4:1~3

(2) この祈りの中の二つのこと

- ① この祈りは感謝をささげる祈りではない。ヨナが自分の個人的な不平不満を申し立てた祈りである。ヨナはニネベに下されるはずだった裁きを神が思い直してやめたことが、不満であった。
- ② この祈りの中で二つ目は、ヨナは自分の死を願った。幸い、この祈りに神は答えにならなかった。

47. 神の激しい怒りが下される年々（大患難期）についての預言者ハバククの祈り

(1) ハバクク3:1~19

(2) 中心テーマは、2節。大患難期におけるイスラエル民族の回復、民族的救いである。

- ① 「この年のうちに」：複数形の年。大患難期7年を指す
- ② 「あなたのみわざ」：イスラエル民族の回復、民族的救いを指す
- ③ 「それをくり返してください」：繰り返すと訳されている原語は、他の箇所（詩71:20、ホセア6:2）では「生き返らせる」。イスラエル民族の再生である。

(3) この祈りの特色

- ① 1節「シグヨノテに合わせて」、19節「指揮者のために。弦楽器に合わせて」とあるように、歌いながら祈ったようである。
- ② メシアの再臨に関する預言が含まれている。預言的な祈りである。
 - 3節の「テマン」は、エドムの地名。ボツラに至る街道沿いにある町。メシアの再臨の場所は、ボツラ付近と預言されている。ハルマゲドンの戦いの第6段階。
 - 13節の「悪者の家の頭」とは、反キリストである。ハルマゲドンの戦いの第7段階。
 - 16~17節は、ハルマゲドンの戦いの第3・第4段階において、反キリストの軍勢がエルサレムを攻撃し、さらにボツラに迫るときの状況である。ハバククは18~19節で主への信頼を歌う。この祈りのしめくりは、一方に目の前に見る恐ろしい危機、他方で主への信頼、この対比である。
- ③ 神からの答えを受けての祈りである。
 - 3章の祈りの前に、1章~2章でハバククが抱えていた霊的な葛藤、そして神との霊的な対話が記されている。
 - 神はなぜイスラエル民族の不信仰と罪を見逃しておられるのか？

- これに対して、神のお答えは、民の罪を見逃しはしない、バビロニヤを用いてイスラエル民族を罰する、と言われる。
- ハバククの葛藤は次に進む。神は、なぜイスラエルよりもっと罪深いバビロニヤを用いるのか？ バビロニヤはさばかれないのか。
- 2章で神は、後の日にバビロニヤをもさばくというご自身の計画を啓示し、ハバククは神がいかに知恵深くそのご計画を進めておられるのかを理解した。

- 3章の祈りは、1章～2章においてハバククが神から受けた答えに基づいて祈られている。

(4) 預言者ハバククの特徴

- ① 一般的に預言者は、時の指導者たちや人々の前に立って神のみことばを伝えた。しかし、ハバククは、そのような働きはしなかった。
- ② ハバククは神との対話の中で得た預言を書き記し、それを後世に残した。

48. ベテルの人々がエルサレムに来て主にうかがいを立てたことに関して

(1) ゼカリヤ 7: 1～7、特に 2 節「主に願う」、3 節「尋ねる」

(2) 1 節 ダリヨス王の第 4 年

- ① 神殿再建工事の再開は、ダリヨス王の第 2 年＝前 520 年（エズラ 4: 24）
- ② 神殿完成は、ダリヨス王の第 6 年＝前 516～515 年頃（エズラ 6: 15）
- ③ よって、ベテルからの一行がエルサレムに来たときは、神殿再建工事中

(3) 2 節 ベテル（これは、人の名ではなく、ある町の名）

- ① この町は、かつて北王国イスラエルの背教の拠点のひとつ。領域内の北方のダンと南方のベテルに「金の子牛」像が設置され、礼拝の対象とされた。
- ② そのベテルの町の人々が、ここでは、エルサレムを真の霊的センターとして認め、主にうかがいを立てるためにやって来た。

(4) 3 節 エルサレムの祭司たちと預言者たちに尋ねた。

- ① 断食について主のみこころを尋ねた。
- ② 「第五の月にも断食して泣かねばならないでしょうか？」
- ③ モーセの律法では、断食は年 1 回、第七の月の十日、贖いの日。この日は、「身を戒めなければならない」＝断食しなければならない（レビ 23: 27）
- ④ 第五の月の断食は、前 586 年にエルサレムがバビロニヤによって破壊されて以降、そのことを悲しんで泣き、断食して、主にエルサレムの回復を祈るためのもの。モーセの律法によるものではなく、当時の習慣であった。
- ⑤ バビロン捕囚が解かれ、エルサレムの神殿が再建される中、今後も第五の月の断食を続行しなければならないのか、という質問であった。

(5) この質問に対する答えは、7: 4～7。断食するよりも、主が先の預言者たちを通し

て告げられたことを行いなさいという勧めである。具体的に何をすべきかは、7：8～8：19で語られる。

- (6) 8：20～23 さらに主の預言は続く。これはメシア王国に関する預言である。今回は、かつて背教の拠点であったベテルの人々が主を認めてエルサレムに来たが、メシア王国ではもっと大きなことが起こる。22～23節 「多くの国々の民、強い国々がエルサレムで万軍の主を尋ね求め、主の恵みを請うために来よう。」 万軍の主はこう仰せられる。「その日には、外国語を話すあらゆる民のうちの十人が、ひとりのユダヤ人のすそを堅くつかみ、『私たちもあなたがたといっしょに行きたい。神があなたがたとともにおられる、と聞いたからだ』と言う」